

「抱直自低迷／含真空破裂」と詠み二十三・二十四句で「縦不得扶持／其奈後凋節」と詠む詩句には道真自身の姿が重ねられているのは自明である。こうした指摘は、既に川口久雄氏の「悲運におしひしがれて、なおかつ忠節を貫こうとしている道真の心を竹に感情移入している。」「川口久雄校注 日本古典文学大系『菅家文章・菅家後集』四九〇補注（八）七三六頁」があるが、筆者には、とりわけ道真の「詠竹詩」について詳細な分析と考察をなされている後藤昭雄氏の学恩に拠る所が大きい。この「490雪夜思家竹」を取り挙げられ考察されている一文を引用が長くなるが以下に紹介する。

竹を「此君」「碧鮮」の語でいうこと、その属性を「直」「貞」「後凋節」などの語でいうこと、あるいは切って釣竿にしようという発想、それらはこれまでに指摘してきたように拠る所がある。そうした措辞はもとより用いるが、雪が埋もれて「碧鮮折る」また竹が「低れ迷う」「空しく破れ裂く」というイメージは、従来の詠竹詩にはたえて見いだしえなかつたものである。（中略）霜雪に逢つても、衆草に異なり、ひとり竹のみは亭々として立つとするのが伝統的な発想である。この道真の詩はそうした旧来の発想の外に立つものである。

それは次のことと深く相関わる。（中略）「直を抱きて自ら低れ迷う」「貞を含みて空しく破れ裂く」のは竹であるとともに道真自身なのである。「扶持すること得ず」とは雪折れの竹を支えるものがないということと、これに重ねて孤立無援の現在の自己の境遇をいうものでもある。「後凋の節」も常緑の竹の性質をいいつつ、逆境に置かれた中での自らの堅固な貞節をいい、何ものもこれを動かすことはできないというのである。すなわち、この詩は単なる詠物詩ではなく、詠竹に託して詩人の内面が詠出された述懐詩となっている。翻つて考えるに、このような述懐詩であることが発想の常套を打ち破ったのである。